

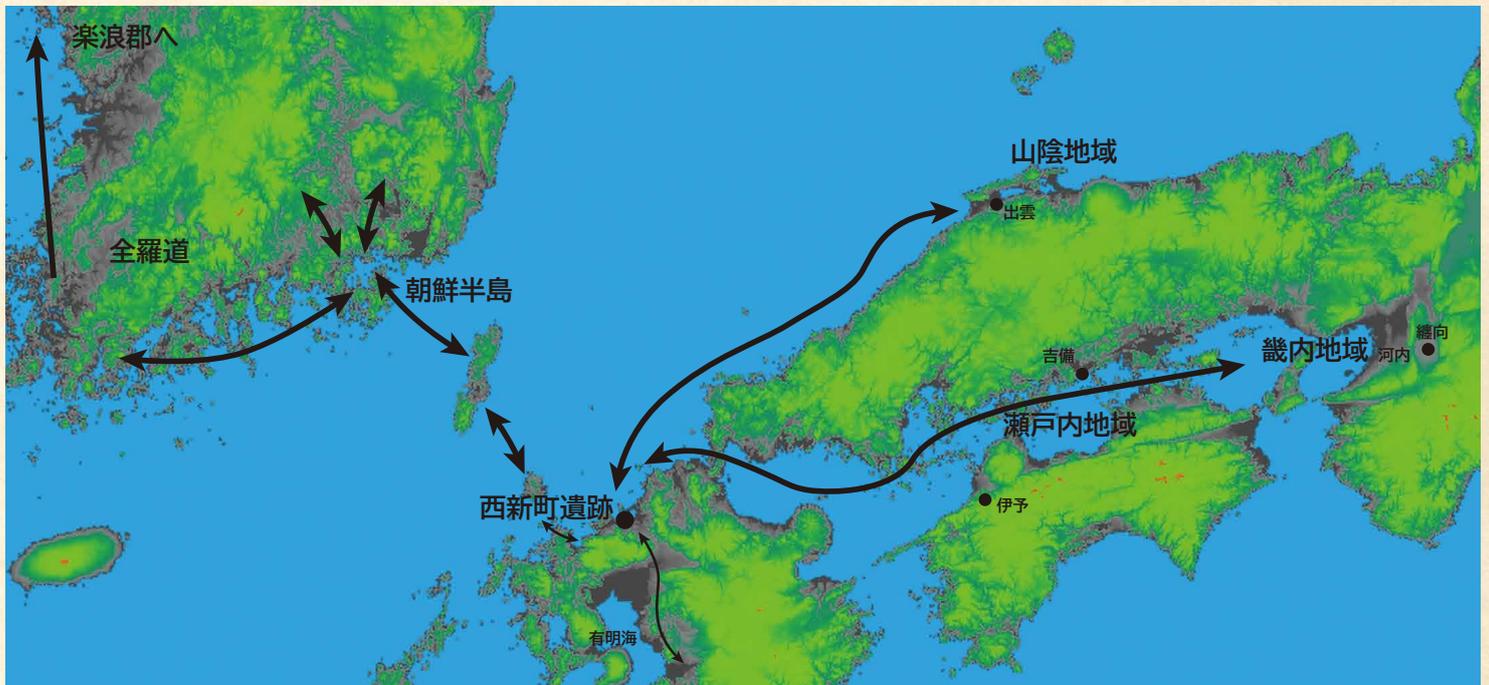
土器が語る。 多文化交流の町、西新町遺跡

～国内外あちこちから来ました～

九州歴史資料館

西新町遺跡は福岡県福岡市早良区西新の県立修猷館高校の敷地を中心に広がる遺跡で、かつて海に面していた砂丘上に立地します。今から約1,700年前の古墳時代初頭には、朝鮮半島や日本の各地域に及ぶ広域の人々が最先端の文物・情報・技術を手に入れるために集まった、当時の日本列島では最大級の国際交易の場でした。交易の対象であったとみられる金属製品、石製品、玉類(ガラス・石)や、それらの素材、製作道具などが出土しています。

各地の人々の来訪をうかがえるものとして、様々な地域に由来する土器が、単体ではなく数多く出土する点が挙げられます。これらの土器の主な系統として、朝鮮半島系土器、畿内系土器、山陰系土器、瀬戸内系土器、九州内各地の土器があります。これから各地域の土器の特徴を見ていきましょう。



西新町遺跡と各地域の交流ネットワーク(国土地理院地図を使用)

その① 朝鮮半島系土器

～朝鮮半島から持って来ました～

西新町遺跡の朝鮮半島系土器は、古墳時代初頭の日本列島内の遺跡では最も数多く出土しています。朝鮮半島南西部の全羅道地域に由来する土器の割合が比較的高く、当時の中国の出先機関であった楽浪郡(現在の平壤近郊)までの航海ルート上にあるこの地域との強い関係性がうかがえます。ただ、半島南岸部や南東部の土器も出土しているため、広い地域を対象に交易が行われていたと考えられます。



多種多様な朝鮮半島系土器

● 陶質土器・瓦質土器

～百年先を行く西新町～

陶質土器・瓦質土器と呼ばれる土器は、西新町遺跡出土土器の中では最も特徴的で、一目見て判別できます。窯で焼いて硬く焼き締められているため、ほとんどが灰色系統の色調です。このような土器は、朝鮮半島から製作技術が伝えられて、日本列島でも須恵器として製作されますが、西新町遺跡の時期から100年ほど後のことになります。



陶質土器・瓦質土器

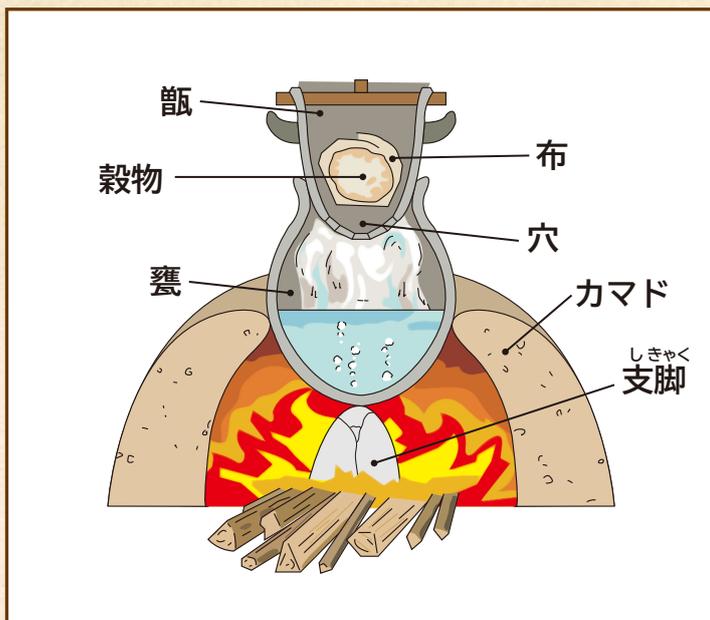
● 軟質多孔式の甑

～お米は固い方が好み？～

朝鮮半島系の土器にも、日本列島の土師器と同様の野焼きでつくった軟質の土器が多数ありました。その中で目を引くのは、当時の日本列島では見られない甑です。甑は、中ほどの高さ的一对の把手が取り付けられ、底に小さな孔が多数あけられています。調理用の土器である甑は、中に水を入れて火をかけた甕の中から立ち昇る高温の蒸気が、甑の底の孔を通過して中の穀物を蒸す仕組みです。この調理法は、多量の蒸気を発生させる高温が必要で、当時の日本列島の竪穴住居に付属する炉では難しいものでした。西新町遺跡では、日本列島内のこの時期では唯一、竪穴住居跡で朝鮮半島から伝わったカマドが多数見つかっていて、蒸し上げる調理方法が可能であったことと一致しています。この調理法は、朝鮮半島から持ち込まれており、朝鮮半島の人々が一定期間滞在した可能性を示しています。



軟質多孔式の甑



カマドによる調理の模式図



模倣・折衷土器

● 模倣・折衷土器

～いいことはどんどん真似しました～

西新町遺跡出土土器には、朝鮮半島と日本列島の双方の特徴をそなえた土器が、少しだけあります。単に形を見て真似だけでなく、模倣対象の土器の作り方や技術がある程度理解して真似ていたようなので、土器製作者同士の技術交流もあったのではないかと想像されます。

その②

畿内系土器

～大和より河内の方が仲良かった?～

西新町遺跡で出土する土器の中で、最も多く出土しているのは畿内系と呼ばれる土器の中でも、特に布留系土器という一群です。初期の段階では畿内産に近く、その後の変化は畿内とは異なっていきます。畿内で新たに現れる器形の土器も作られるため、その時々で畿内から最新の情報を得ていると考えられます。これらのことから、布留系土器を作った人々は、一定の頻度で畿内との交流があったと想像されます。

●布留系甕

～サイズの多さは一番です～

西新町遺跡出土の布留系土器の中でも、特に多いのは甕です。火をかけて煮沸等の調理を行う時に熱効率よく加熱するために、土器を製作する際に内面の粘土を削りとり器壁をかなり薄く(2mm程度まで)しています。西新町遺跡の布留系甕は、大小様々なサイズが揃っており、また縦に長い長胴傾向のものも多数あります。これは、様々な地域から多様な文化を持つ人々が集う西新町遺跡ならではのことで、長胴であるのは、地元(河内)の甕が長胴であることや、カマドにかけやすくするために影響を受けた可能性があります。

●小型精製器種

～お祭り用の土器はしっかり作りました～

橙褐色の精選された粘土を使用し、ミガキという技法で表面に光沢をもたせ、非常に丁寧に作られた土器を小型精製器種と呼んでいます。布留系土器の畿内での系統が大きく河内(大阪府中部)と大和(奈良県南東部)に分かれる中で、西新町遺跡の小型精製器種は河内のものと非常に近い作りをしているため、西新町遺跡の土器工人は河内の工人と関係があると考えられます。



畿内系土器



大小様々なサイズの布留系甕



小型精製器種

その③

山陰系土器

～博多にしょっちゅう来ていました。福岡大好き～

西新町遺跡で畿内系土器に次ぐ出土量がみられるのが山陰系土器です。山陰以外の地域の中ではこの時期最も集中して山陰系土器が出土しています。壺、甕、鉢などで、口縁部に強い稜のある屈曲を伴う、二重口縁となるのが特徴です。山陰から搬入された土器が一定数ありますが、山陰地方の技術を用いて、西新町遺跡で製作された土器もあり、形の変遷は、山陰地方で出土する土器と、基本的に一致しています。これらのことから、西新町遺跡と山陰地方の間には、継続的かつ緊密な関係性があり、土器工人を含めた人々の往来が盛んであったと考えられます。



山陰系土器

その④ 瀬戸内系土器

～吉備の人は食に頑固～

瀬戸内系の土器の出土量は、少ない傾向にあります。それらは、ほぼ搬入品に限られ、特にその主体を占める吉備系（現在の岡山県、広島県東部、香川・兵庫県の一部含む範囲）の土器は、甕と鉢に限られます。また、甕の煤の付き方が吉備と同じであることから、吉備の人々がやって来て、生活の中で同じように使用した可能性が非常に高いと言えます。一方で、対岸の四国側の土器はごくわずかで、器種は壺に限られています。瀬戸内の中でも、地域によって交流のあり方が異なるようです。



瀬戸内系土器

その⑤ 九州内の他地域の土器

～ときどき来ました～

西新町遺跡では、この時期の壺・甕は丸底ですが、脚部の付いた特徴的な底部の甕がわずかながら見つかっています。これは福岡県の筑後地域や佐賀平野、熊本北部などの有明海沿岸地域を中心に出土する甕です。九州中部からも西新町遺跡に来ていたことがわかります。



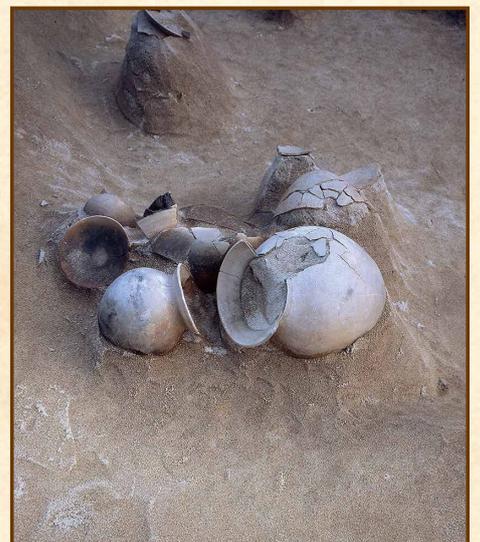
脚付きの甕

土器が物語る多彩な交流

西新町遺跡では、古墳時代初頭では他に類を見ない、多彩で多量の外来系土器が出土し、それらが各地との交流を物語っていることをお伝えしました。一方で、各地の土器が一様に出土しているのではなく、出土量の差、器種のセットの揃い具合、搬入品とそれを模倣したものなど、様々な要素が複雑に絡まっているようです。この差には、各地域との物や情報の動きだけでなく、人自体の動きの規模や頻度が関わっているとみられ、それは各地と西新町遺跡との交流の内容、関係性に現れていると考えられます。さらに、土器の大多数を占める畿内系と山陰系の間では、山陰系の技術が畿内系土器に取り入れられているものもあるようです。このような状況は、この二地域が西新町遺跡と特に深い関係を持っていたことによると考えられます。

なお、出土土器の中には、どこの地域と関係のある土器なのかははっきり分からないものが残りました。今後の資料の蓄積や研究の進展によって、新たな系譜先の推定が期待されます。

福岡県教育委員会では、令和4年度から令和6年度にかけて西新町遺跡出土品の再整理事業を実施します。その中で、今回対象となった各地域の研究者が、西新町遺跡から出土した土器を実際に見て、議論した中で所見が今回ご紹介する内容の基となっています。また、これらの内容も踏まえて、再整理事業の中でより活用を図っていく資料とその他の資料に分けて整理が行われます。



土器出土状況(17次調査9号住居跡)

「土器が語る。多文化交流の町、西新町遺跡」 ～国内外あちこちから来ました～

発行：九州歴史資料館 発行日：令和5年12月5日
URL：<https://kyureki.jp> 印刷：株式会社 三光